

新しい自己意識的感情尺度の開発¹⁾

菊池 章 夫

岩手県立大学社会福祉学部

有 光 興 記

神戸親和女子大学文学部

628名の大学生の回答をもとに確認的因子分析を繰り返すことで、6つの自己意識的感情（対人的負債感・個人的苦痛・恥・罪責感・役割取得・共感的配慮）を測定する12シナリオ（場面）・72項目からなる尺度（KA-JiKoKan-12）が構成された。この尺度の信頼性は、 α 係数・再テスト信頼性係数とも十分なものであった。その妥当性は、これらの感情に対応あるいは関連する他の特性的尺度（罪悪感喚起状況尺度・状況別羞恥感情質問紙・対人的反応性指標・心理的負債感尺度）および行動指標（攻撃性質問紙・向社会的行動尺度）との関係を分析することで検討された。得られた結果はいずれもおおむね満足すべきもので、この尺度が十分な妥当性を持つことを示していた。「全体的考察」では、こうした結果を背景にして、シナリオ方式の利点や問題点、この尺度が測定している感情の性質、弁別的妥当性の問題などが論じられた。

キーワード：自己意識的感情，シナリオ形式の尺度構成，確認的因子分析，感情規則

問 題

最近では、共感や個人的苦痛、恥、罪責感、負債感、プライドや高揚感とあわせて、自己意識的感情（self-conscious affectあるいはself-conscious emotion）と呼ばれることが多くなっている（Tangney & Fischer, 1995）。これらの感情はいずれも自己とのかかわりで生じ、自己との関係で意識されることが多いからである。また、自己意識的感情に属する感情は他の感情に比べて、ある場面で同時に感じられることが多く、それらを感じる当人にはその間の区別が難しいという特徴も持っている。本研究の目的は、このような特徴を持つ自己意識的感情の一部を測定する日本人大学生向けの尺度を新たに構成することである。

筆者らがこの種の感情に関心を抱いたもうひとつの理由は、自己意識的感情の多くが向社会的行

動の動機として考えられてきたためである。そして、向社会的行動の動機の研究を述べることが自己意識的感情研究の流れの大筋を示すことにもなるので、以下にはこの点を中心に説明する。

向社会的行動の動機としては、以前から共感（empathy）がとり上げられてきている。共感がどのような内容を持つかについては研究者の間で意見の相違があって、そのことが共感をめぐる研究を難しいものにしてきた。特に、こちらと相手との間での感情のマッチングが必要かどうかは研究者の間での議論の焦点となっている。また、共感の認知的側面（役割取得など）と感情的側面（共感的配慮など）のどちらを重視するかについても、研究者によって意見がさまざまである。しかし現在では、感情のマッチングがない場合をも含めて共感を広く考え、この2つの側面のどちらをもそこに含めていこうとするのが、この領域の研究の傾向であるといえる（Davis, 1999）。いずれにしても、共感が向社会的行動の動機となることには異論は少ない。

1) データの分析手法などについて多くの示唆を与えられた3人の査読者の方々に感謝する。

向社会的行動の動機として、次にとり上げられたのが個人的苦痛 (personal distress) である (Batson, 1991). 共感がおおむね他者指向的であるのに対して、個人的苦痛は自己指向的な感情である。このために、個人的苦痛を動機としてなされる向社会的行動では、相手の苦痛などを見ることから生じる覚醒状態 (ドキドキ・イライラなど) を低減させることが中心になっている。この場合にも、相手に対する向社会的行動が結果的にその苦痛などを低下させることはあるが、それよりも相手の苦痛などが低下することの結果としてこちらの覚醒状態が低減されることにその機能があるといえる。このことから、Batson が実験的に示したように、個人的苦痛が動機となる際には、その場から逃げることができるような状況では向社会的行動はとられず、逃げにくい状況に置かれたときにだけこのタイプの行動がとられることになる。

この他に恥 (shame) や罪責感 (guilt) も、向社会的行動の動機として問題にされている (有光, 2002c; Tangney & Dearing, 2002). この2つは、いずれも自分についての否定的な感情である点で共通しているが、自己との関係でやや違った特徴を持っている。恥は自己についての全体的な否定であるが、罪責感では自分のとった特定の行動が問題である。このために、罪責感相手への向社会的行動と結びつきやすいのに対して、恥では向社会的行動とのつながりはみられず、むしろ相手に対しての攻撃的行動を生みやすいとされている。また罪責感については、向社会的行動とのかかわりでさまざまな様態 (関係の罪責感・生存の罪責感など) とその様態に応じた機能があることが指摘されている (Hoffman, 2001).

さらにいえば日本人の場合には、思いやりとしての向社会的行動は義理や人情、あるいは恩との関係で論じられることが多い。この点についての実証的な資料は少ないが、相川・吉森 (1995) がとり上げた心理的負債感はこの問題につながるものであろう。ここでいう心理的負債感とは「他者

から好意や援助を受けたことをどの程度心理的負担と感じ、それにどの程度耐えられるか、またどの程度この負担を低減したいと感じるか」であるとされている。この考えに従うと、少なくとも義理や恩は、心理的負債感の一部として捉えることができよう。

これらの自己意識的感情を測定する尺度としては次のようなものが知られている。対人的反応性指標 (Interpersonal Reactivity Index=IRI: Davis, 1983) は共感を多次元的にとらえようとする尺度である。この尺度は28項目からなるリカート式の尺度で、想像性・共感的配慮・視点取得・個人的苦痛の4つを測定することができる。ここでいう「共感的配慮」は共感の感情的側面、「視点取得」はその認知的側面である。この尺度の日本語版は桜井 (1988) や明田 (1999) によって作成され、その信頼性や妥当性が検討されている。

恥や罪責感を測定する尺度には TOSCA-3 (Test of Self-Conscious Affect-3: Tangney & Dearing, 2002) がある。この尺度は、恥などを体験しやすいような具体的シナリオを示して、その際に感じられる感情や対処方法などを測定しようとしている。TOSCA-3 には肯定的シナリオ5場面 (難しい用件の電話でうまく話せたなど) と否定的シナリオ11場面 (友人との待ち合わせの約束をすっかり忘れたなど) とから構成された版と、否定的シナリオ11場面だけを用いた短縮版とがある。後者の短縮版の日本語版は菊池 (2003) が作成し、その信頼性を検討したほか、対人的反応性指標 (IRI: Davis, 1999) や向社会的行動尺度・大学生版 (菊池, 1988) などを用いて、その妥当性をも検討している。その際明らかになったこととして、罪責感が向社会的行動と結びつくのに対して、恥ではそうした結びつきがみられないことがある。この尺度の青年版である TOSCA-A の日本語版は、水野 (1998) と岡田 (2003) によって作成されている。なお、TOSCA はいずれの版も、恥と罪責感のほかに無関心 (detachment) と責任逃れ (external-

ization) とを測定するようになっている。

本研究では、これらの尺度（特に TOSCA-3）を参考にしながら、日本人大学生向けの新しい自己意識的感情尺度を構成し（研究 I）、その尺度の妥当性を検討しようとした（研究 II）。その目的は、外国で開発された尺度の日本語版の作成ではなく、項目収集の段階から日本語を用いた尺度構成をすることにある。その際にとり上げたのは、「対人的負債感」「個人的苦痛」「罪責感」「恥」と共感の感情的・認知的側面に対応する「共感的配慮」と「役割取得」との6種の自己意識的感情である。これら6種の自己意識的感情を、具体的なシナリオによって設定された場面を用いて同時に測定しようとするのが、今回の尺度の特色である。

研究 I 尺度の構成

シナリオの作成 有光 (2002a) の罪悪感喚起状況尺度では、因子分析的検討の結果、罪悪感を喚起する状況として「他傷」「他者への配慮不足」「利己的行動」「他者への負い目」があげられている。成田・寺崎・新浜 (1990) の状況別羞恥感情質問紙では、因子分析の資料によって、羞恥感情の生じやすい状況が「かっこ悪さ」「気はずかしさ」「自己不全感」「性」に分類されている。いずれの場合にも、それぞれのカテゴリーには具体的な行動（例えば「他傷」では、友人を裏切ったとき・他人との約束を破ったとき・友人の物をなくしたときなど）があげられているので、それを基にして（例）にみられるような33場面のシナリオを作成した。また、この33場面のシナリオごとに上で見た6つの感情を示す短文（全体で198文）を作成した。この短文への回答は、「必ずそうする／そう感じる」から「決してそうはしない／そうは感じない」までの5件法で求めた。採点は「必ずそうする／そう感じる」が5、「決してそうはしない／そうは感じない」が1である。

（例）友人と夕方6時にいつもの場所で待ち合わせをしていたのに、6時半に友人からケイタイ

で連絡があるまで、すっかり忘れていました。

- ①義理を欠くようなことをしてしまったと思う。
- ②急なことでおろおろしてしまう。
- ③すぐそこへ行って、謝らなくてはと思う。
- ④無責任なことをしてしまったと感じる。
- ⑤友人はどんな気持ちで待っているのだろうか
と考える。
- ⑥友人を悲しませてしまったと感じる。

この（例）の場合、それぞれは①対人的負債感 ②個人的苦痛 ③罪責感 ④恥 ⑤役割取得 ⑥共感的配慮を測定する項目である。

この尺度の構成にシナリオ形式を用いるのは、次のような理由からである (Tangney & Dearing, 2002)。その1つは、自己意識的な感情の多くが具体的な場面と結びついていることである。例えば恥や罪責感、ある具体的な場面の中で生じる感情であって、具体的な場面を離れては意味を持たないことが多い。2つ目には、この種の感情は具体的な場面での具体的な項目について生じるのであって、抽象的な概念を基に生じるものではない。そのためシナリオ方式では、抽象的な表現（例えば、「恥」「罪責感」など）は使わずに、具体的な行動を項目内容としている。3つには、この形式をとることで、自己防衛的な反応やタテマエ的な回答を少なくすることができる。この尺度で求められているのは、「どう感じるか」であって「どう感じるべきか」ではない。もちろんこうしたシナリオ形式の持つ利点の裏には、それなりの問題が含まれていることは言うまでもないが、そのことは後に「全体的考察」で論じる。

6つの感情の定義 この尺度がとり上げている6種の感情について、質問項目を挙げながら、説明する。

- ①対人的負債感：「同じゼミ生として面目ないと感じる」「友人に顔向けのできないことをしてしまったと思う」など、義理などを含めた負い目の感情。
- ②個人的苦痛：「自分の陥った状況にイライラ

する」「ドキドキして気分が落ち着かなくなる」など、自己指向的な覚醒状態を伴う感情。

- ③罪責感：「すぐに友人に謝らなくては、と考える」「来学期こそ友人たちに迷惑をかけないようにしたいと思う」など、特定の行動の失敗と関連した感情。
- ④恥：「自分は人より劣った人間だと思う」「自分は無責任な人間だと思う」など、自己全体についての否定的感情。
- ⑤役割取得：「他のゼミ生は、自分のことをどのように見るだろうかと思う」「友人はどんなにがっかりするだろうかと気になる」など、相手の立場に立って推測しようとする傾向。
- ⑥共感的配慮：「自分のようなだめな友人を持って気の毒だと思う」「手前勝手な友人を持って大変だろうと感じる」など、相手の感情を共感的に想像しようとする傾向。

調査の実施 この33場面のシナリオ形式の質問紙について、大学生628名（男子183名・女子445名）に回答してもらった。いずれも心理学関係の授業の一部として、2003年1月から5月の間に実施された。

結果の分析 この資料について、198（33シナリオ×6項目）項目別の平均値などの男女差を検討したが、大きな差は見られなかったため、以下では男女別の検討は行わない。

1) I-T 相関 6つの感情別の尺度得点とそれぞれの項目とのI-T相関係数を計算した結果、それぞれの尺度別の平均と範囲は、① .43 (.54~-.02), ② .44 (.50~.19), ③ .44 (.54~.22), ④ .52 (.57~.27), ⑤ .51 (.58~.22), ⑥ .51 (.58~.20)であったが、一部に低い相関を示す項目もみられた。この相関係数が6つの感情すべてで.35以上のシナリオが23場面あった。

2) 確認的因子分析 23のシナリオについて、6つの尺度の因子構造が単一であるかどうかを検討するために、同じ大学生628名の資料を用いて確

認的因子分析を行った。用いたソフトはSASver 6.11のproc calisである。適合度は1因子あたりの項目数が多いためにRMSEAを参照した。RMSEAは項目数が多いときに頑健な結果を示す適合度指標である（豊田，2000）。RMSEAは数値が低いほど適合度が高いことを示し、.10以上の場合には適合が悪いとされ、.07未満が良い適合度の基準とされている。RMSEAはそれぞれ① .0722, ② .0805, ③ .0601, ④ .0581, ⑤ .0828, ⑥ .0774で、十分な適合度を持つ（.07以下）とはいえないものもあるが、豊田（2000）による適合度の許容範囲内（.10未満）には収まっていた。

3) 最終的なシナリオと項目の確定 この確認的因子分析の結果、因子負荷量が各尺度とも.40以上のものは23場面中で12場面であった。最終的には、この12シナリオを用いてこの尺度を構成した。この版を「菊池・有光/自己意識的感情尺度-シナリオ版」と呼び、KA-JiKoKan-12と略称する²⁾。回答は前述の5件法で求めるので、各尺度の得点は12~60の間に分布可能である。

4) 12シナリオ版についての資料 この最終版について、因子の妥当性を確認するためにSASver6.11のproc calisを用いて確認的因子分析を行った。この場合には5つのモデルを想定して、もっとも適合度の良いモデルを採用することとした。具体的には、p) 6因子が相関関係を持つ「6因子相関モデル」、q) 6因子が相関関係を持たない「6因子無相関モデル」、r) 6因子の上位に2次因子である自己意識的感情を想定する「2次因子モデル」、s) 72項目が1つの因子に負荷することを仮定した「1因子モデル」、t) 各シナリオを因子として対人的負債感や個人的苦痛などの6変数が負荷するという「シナリオ12因子モデル」の5つを想定した。

そして、この5つのモデルについて確認的因子

2) この尺度と採点盤とを必要とされる方は、960-0241 福島市笹谷字堀端1-11 菊池章夫に連絡されたい。

Table 1 6因子相関モデルの因子負荷量および因子間相関

No.	①対人的負債感	②個人的苦痛	③罪責感	④恥	⑤役割取得	⑥共感的配慮
1	.36	.57	.36	.46	.41	.45
2	.54	.50	.32	.58	.61	.55
3	.45	.58	.61	.67	.51	.55
4	.50	.47	.45	.35	.59	.57
5	.32	.38	.41	.58	.34	.50
6	.42	.42	.33	.62	.37	.50
7	.46	.45	.46	.53	.45	.33
8	.43	.37	.42	.49	.46	.57
9	.61	.60	.51	.49	.62	.62
10	.55	.37	.40	.52	.43	.47
11	.58	.60	.51	.52	.48	.47
12	.44	.35	.48	.45	.50	.46
因子間相関						
②	.76	—	—	—	—	—
③	.75	.43	—	—	—	—
④	.89	.64	.83	—	—	—
⑤	.82	.58	.82	.85	—	—
⑥	.91	.63	.86	.82	.94	—

注. No.はシナリオの番号, ○付のものは尺度の番号である.

分析を行ったところ, RMSEA はそれぞれ p) .0641, q) .0746, r) .0645, s) .0682, t) .0691 であって, q) の「6因子無相関モデル」以外はよい適合度を示した. この4つのモデルの中からもっとも適合度のよいモデルを採択するために, AIC と CAIC を用いて適合度を比較した. AIC と CAIC とはモデルの比較に適切な指標で, 数値の少ないほうが適合度が高いとされる(豊田, 1992). 各モデルの AIC はそれぞれ p) 3891.35, q) 6176.96, r) 3995.53, s) 4774.22, t) 4927.07 であり, CAIC は p) -9551.72, q) -7347.75, r) -9496.53, s) -8755.93, t) -8537.77 であった. AIC と CAIC とともに p) の「6因子相関モデル」がもっともよい適合度を示したので, p) の「6因子相関モデル」を採択した. ただし, AIC, CAIC とともに r) の「2次因子モデル」と p) 「6因子相関モデル」の差はわずかであった.

「6因子相関モデル」の因子負荷量と因子間相関を Table 1 に示した. 因子負荷量はいずれの尺度についても.30 以上であった. この結果は, 今回作成した自己意識的感情尺度(12シナリオ版)の

因子的妥当性を示したものである. 因子間相関のデータを見ると, ②の個人的苦痛(.43~.76)を除いては因子相互に高いプラスの相関関係(.75~.94)が認められる. このことは, ここの6尺度の得点をまとめて自己意識的感情尺度得点を算出することが可能であることを示していると解釈される. それは, r) の「2次因子モデル」についてもこれと同じような適合度の高さ(RMSEA: .0645 など)が示されていることとも関連したことであり, 6因子の上位に2次因子の「自己意識的感情因子」を想定できることを意味している. しかしこの点は, 今回の尺度が弁別的妥当性に欠ける尺度である可能性を示唆しているとも考えられるので, 後に「全体的考察」の部分で検討する.

5) 信頼性の検討 同じ版についての6尺度別の α 係数は, ① .77, ② .77, ③ .72, ④ .81, ⑤ .79, ⑥ .80 であり, ある程度の内部一貫性があるといえる. また, 大学生84名(男子26名・女子58名)について, 2週間間隔で実施したこの尺度の再テスト信頼性係数は, ① .75, ② .76, ③ .71, ④ .68, ⑤

Table 2 自己意識的感情尺度 (KA-JiKoKan-12) の基礎統計量および相関係数

尺度名	平均値	標準偏差	①対人的負債感	②個人的苦痛	③罪責感	④恥	⑤役割取得	⑥共感的配慮
①対人的負債感	46.1	7.0	<u>.77</u>					
②個人的苦痛	39.8	7.7	.56	<u>.77</u>				
③罪責感	50.5	5.5	.56	.30	<u>.72</u>			
④恥	47.3	7.3	.71	.51	.63	<u>.81</u>		
⑤役割取得	41.3	8.0	.64	.46	.60	.68	<u>.79</u>	
⑥共感的配慮	46.7	7.2	.72	.49	.65	.67	.73	<u>.80</u>

注. 相関係数は、すべて $p < .01$ で有意. 相関行列の対角線上には、 α 係数を示した.

.80, ⑥ .80 で、この尺度が安定性を持つことを示している.

6) 基礎統計量など この版についての基礎統計量と尺度間の積率相関係数などは Table 2 のとおりである. 尺度間の相関についてみると、この場合にも「個人的苦痛」(.30~.56) を除いて、この相関関係が高くなっている (.56~.73). このことは因子間相関と同様に、ここで問題としているのがいずれも自己意識的感情であることに由来している. しかし一方では、この尺度の弁別的妥当性に問題を残すとも考えられるので、この点は後に(全体的考察)くわしく検討する.

研究 II 尺度の妥当性の検討

こうして構成された自己意識的感情尺度 (KA-JiKoKan-12) の妥当性を検討するために、次のような尺度との関係を検討した. a) から d) までは、自己意識的感情尺度での概念と対応する概念を測定する尺度で、e) と f) とは自己意識的感情と関連すると予想される行動を問題とする尺度である. いずれについても、その信頼性や妥当性は既に検討されている. なお、() あるいは「 」内は項目の例である.

a) 罪悪感喚起状況尺度 (有光, 2002a): 他傷 (友人を裏切ったとき)・他者への配慮不足 (友人を仲間はずれにしたとき)・利己的行動 (未成年であるのに、お酒を飲んだとき)・他者への負目 (親に金銭的負担をかけていると思ったとき) の 37 項目, 回答は 4 件法であった. この尺度の

得点は今回の尺度の「罪責感」尺度とプラスの関係が予想される.

b) 状況別羞恥感情質問紙 (成田・寺崎・新浜, 1990): かつこ悪さ (みっともない髪型や服装をしている時)・気はずかしさ (初対面など, 知らない人と話をする時)・自己不全感 (自分のしたことを後悔する時)・性 (ヌードやポルノシーンのポスターを見た時) の 69 項目, 回答は 4 件法であった. このいずれの下位尺度についても、今回の尺度の「恥」の得点とプラスの関係があると予想できる.

c) 対人的反応性指標 (IRI: Davis, 1983): 想像性 (小説の登場人物の感情に、本当にのめり込んでしまう)・共感的配慮 (自分より不幸な人びとについて、やさしさや配慮の感情を持つことが多い)・視点取得 (物事を決めるには、みんなの反対意見をよく聞いてからにしようとする)・個人的苦痛 (緊急の事故などに会おうと、気になって、落ち着いておれない) を測定する. 各 7 項目, 合計 28 項目で構成され, 回答は 5 件法であった. 今回は菊池版 (Davis, 1999) を用いた. 4 つの尺度の中で、共感の感情的側面である共感的配慮は今回の尺度の「共感的配慮」と、認知的側面である視点取得は「役割取得」と同じ概念であることから、いずれもプラスの相関関係が予想される. 個人的苦痛についても、「個人的苦痛」との間に同様の予測をすることができる.

d) 心理的負債感尺度 (相川・吉森, 1995): 「誰かが私の命を救ってくれるようなことがあれ

Table 3 自己意識的感情尺度 (KA-JiKoKan-12)と各尺度間の相関関係

尺度名	①対人的負債感	②個人的苦痛	③罪責感	④恥	⑤役割取得	⑥共感的配慮
a) 罪悪感喚起状況尺度 (合計)	.46*** (.10)	.40*** (.06)	.53*** (.30***)	.53*** (.08)	.54*** (.12)	.52*** (.08)
b) 状況別羞恥感情質問紙						
かっこ悪さ	.51*** (.12)	.44*** (.09)		.55*** (.25**)	.38*** (-.15)	.48*** (.14)
気恥ずかしさ		.44*** (.21**)		.46*** (.16**)	.40*** (.05)	.45*** (.22)
自己不全感	.58*** (.23**)	.52*** (.21**)		.61*** (.25**)	.48*** (.09)	.49*** (-.06)
性				.37*** (.09)	.35*** (.09)	
c) 対人的反応性指標						
視点取得					.31*** (-.03)	
共感的配慮					.34*** (.04)	.42*** (.07)
個人的苦痛		.40*** (.00)		.39*** (.08)		
d) 心理的負債感尺度	.45*** (.11)			.48*** (.22**)	.40*** (.01)	

注. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, ()内は、他の5変数を統制した偏相関係数を表す。

ば、私は一生その人に恩を感じるだろう」「私はお返しをする時、多少の負担(金銭、時間など)は気にしない」など、返報性を中心とした18項目から構成され、回答は6件法であった。今回の尺度の「対人的負債感」との間にプラスの関係が予想される。

e) 向社会的行動尺度・大学生版(菊池, 1988):「列に並んでいて、急ぐ人のために順番を譲る」「自動販売機や切符売り機などの使い方を教えてあげる」などの20項目からなり、この種の思いやり行動をどの程度しているかを測定するのが目的である。回答は5件法であった。向社会的行動は共感(役割取得・共感的配慮)や罪責感とプラスの結びつきがあることが、従来とも指摘されている(Tangney & Dearing, 2002; 菊池, 2003)。

f) 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ: 安藤・曾我・山崎・島井・島田・宇津木・大芦・坂井, 1999)の一部: 身体的攻撃(挑発されたら、相手をなぐりたくなるかもしれない)の6項目・言語的攻撃(意見が対立したときは、議論しないと気がすまない)の5項目を用い、回答は5件法で求めた。攻撃的行動が一般的に言って恥と関連を持ち、罪責感とはそうではないとするデータが示されてきている(Tangney & Dearing, 2002)。

調査の対象など これらの尺度と今回作成した

自己意識的感情尺度とについて、次のような対象に回答してもらった。いずれも大学での心理学関係の講義の一部として実施され、2003年1月から2004年6月にかけて資料収集が行われた。a)とb)大学生262名(男子70名・女子192名)、c)大学生261名(男子70名・女子191名)、d)大学生160名(男子70名・女子90名)、e)大学生182名(男子66名・女子116名)、f)大学生242名(男子89名・女子152名・不明1名)なお、どの場合にも男女別の検討は行わなかった。

結果と考察 Table 3には、こうして得られたデータについて計算した積率相関係数を示した。自己意識的感情尺度のいずれの尺度についても、それに対応する他の尺度との相関が高くなっているといえる。①対人的負債感はd)の心理的負債感尺度と.45、②個人的苦痛はc)のIRIの「個人的苦痛」と.40の相関を示している。③罪責感にはa)罪悪感喚起状況尺度の合計得点と.53、④恥はb)状況別羞恥感情質問紙の「かっこ悪さ」「気恥ずかしさ」「自己不全感」「性」とそれぞれ.55・.46・.61・.37の有意な相関関係が認められた。共感を構成する⑤役割取得と⑥共感的配慮では、それぞれc)IRIの「視点取得」と.31・「共感的配慮」と.42の有意な相関が認められた。こうした結果は、これらの尺度が収束的妥当性を持

Table 4 自己意識的感情尺度 (KA-JiKoKan-12) と行動指標との関係

	①対人的負債感	②個人的苦痛	③罪責感	④恥	⑤役割取得	⑥共感的配慮
e) 向社会的行動尺度・大学生版	.13 (-.08)	.07 (-.08)	.22** (-.06)	.21** (.03)	.27*** (.16)	.27*** (.11)
f) 攻撃性質問紙						
言語的攻撃	-.22** (-.01)	-.18** (-.05)	-.09 (-.07)	-.26*** (-.13*)	-.19** (-.02)	-.22** (-.06)
身体的攻撃	-.09 (.04)	.10 (.19**)	-.23** (-.15*)	-.14* (-.04)	-.13* (-0.2)	-.17** (-.11)

注. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, ()内は、他の5変数を統制した偏相関係数を表す。

つことを示している。

Table 3にはこの他に、概念的に対応する尺度以外の尺度で、対応する尺度と同じかそれ以上の相関を示したのも表記した。①対人的負債感では、状況別羞恥感情質問紙の2尺度(.51・.58)と罪悪感喚起状況尺度(.46)との間にこうした相関関係が認められた。相手に負債感を感じるような状況では、同時に恥や罪責感が感じられると考えられる。②個人的苦痛の場合にも、状況別羞恥感情質問紙の3尺度(.44・.44・.52)と罪悪感喚起状況尺度(.40)について高い相関がみられた。個人的苦痛が感じられる際にも、恥や罪責感が伴うことが多いことを示す結果である。③罪責感ではこの種の関係はみられず、この感情は相対的に独立したものと見える。④恥については、罪悪感喚起状況尺度(.53)と心理的負債感尺度(.48)、IRIの個人的苦痛(.39)との間で高い相関関係がある。恥は罪悪感と区別しにくい感情であり、それが喚起されるような状況では、負債感や個人的苦痛が同時に感じられる。⑤役割取得では、罪悪感喚起状況尺度(.54)と状況別羞恥感情質問紙の4尺度(.38・.40・.48・.35)、心理的負債感尺度(.40)、IRIの共感的配慮(.34)との間で高い相関関係がみられた。今回開発された尺度での役割取得では、罪悪感・羞恥感・負債感・共感的苦痛など多様な感情が伴うことが多い。⑥共感的配慮については、罪悪感喚起状況尺度(.52)と状況別羞恥感情質問紙の3尺度(.48・.45・.49)の場合に高い相関関係が得られている。罪悪感や恥が向社会的な共感的配慮の感情を生むのかもしれない。

こう考えるとこれらの高い相関値の意味は理解でき、それが概念的妥当性の資料となっていると考えることができる。しかし一方では、新しく開発された尺度の一部に弁別的妥当性の点で問題があることが示唆されている可能性も高い。この点は後に、「全体的考察」で検討する。

Table 4は現実の行動(向社会的行動・攻撃行動)との関係についての資料であるが、この場合には6つの尺度すべてとの相関関係を示した。e)向社会的行動尺度・大学生版との関係では、共感の2つの側面である「役割取得」「共感的配慮」とそれぞれ.27の有意の相関関係が認められた。また、「罪責感」と「恥」についても.22と.21という有意の関係がみられた。これに対して、「個人的苦痛」ではこうした関係はみられないし、「対人的負債感」でも傾向は同じである。個人的苦痛が向社会的行動と結びつくのは、特定の場面(例えば、逃げにくさ場面)であることが知られている(Batson, 1991)が、今回はこうした場面の種類の区別をしていないことから生じた結果と考えられる。もうひとつの行動面での尺度であるf)攻撃性質問紙(BAQ)との関連では、身体的攻撃と「罪責感」(-.23)、「共感的配慮」(-.17)、言語的攻撃と「対人的負債感」(-.22)、「個人的苦痛」(-.18)、「恥」(-.26)、「役割取得」(-.19)、「共感的配慮」(-.22)との有意な負の相関関係が認められた。身体的攻撃と言語的攻撃とでは有意の相関係数の数にやや違いがあるのは、大学生の多くにとって身体的攻撃よりも言語的攻撃のほうが日常的にされやすいことの結果かもしれない。

2つの行動指標についての結果のなかで、共感（役割取得と共感的配慮）が向社会的行動の促進要因となり、攻撃行動ではその抑制要因となることは、先行研究と一致した結果である（Davis, 1999）。しかし、罪責感や恥との関係については、罪責感が向社会的行動につながり、恥は攻撃性と結びつくというアメリカでの資料（Tangney & Dearing, 2002）や恥が向社会的行動とは関連しないというTOSCA-3（短縮版）の日本語版での結果（菊池, 2003）とはやや違っている。今回の資料では、罪責感と恥の双方が向社会的行動とプラスの、攻撃的行動とはマイナスの関連を持っている傾向が見られる。これが周囲の人びととの対人関係を重視するという日本人の対人行動の特徴（有光, 2001; 2002b）から出てきた結果なのか、それともアメリカ生まれの尺度と日本製の尺度との違いからくることなのかは、今後検討すべきことである。

Table 3と4には、自己意識的感情尺度の6尺度それぞれについて、他の5尺度の影響を統制した偏相関係数を()内に示してある。統制する変数の数が多くなると偏相関係数の値は小さくなるが、特にここでのデータのように尺度間相関が高い場合には、さらにそうしたことがいえる。Table 3に示したように、概念的に対応する罪責感と罪悪感喚起状況尺度(.30)、恥と状況的羞恥感情質問紙の3尺度(.25・.16・.25)との間で有意の関係がみられたが、他の4尺度（対人的負債感・個人的苦痛・役割取得・共感的配慮）では概念的に対応する尺度間での有意の関係は得られていない。この4尺度については、収束的妥当性が十分とはいえないという結果である。またTable 4では、向社会的行動尺度・大学生版については有意の関係は見出されなかった。攻撃性質問紙の言語的攻撃と恥(-.13)との間、身体的攻撃と個人的苦痛(.19)、罪責感(-.15)との間に弱いながら有意の関係がみられた。この結果から、恥と罪責感とは攻撃的行動を抑制し、個人的苦痛はこの種の行動

を促進する可能性があることになる。

全体的考察

今回新たに構成された自己意識的感情尺度(KA-JiKoKan-12)は、6種類のこのタイプの感情（対人的負債感・個人的苦痛・罪責感・恥・役割取得・共感的配慮）を、シナリオ形式で測定しようとする尺度である。この尺度の作成過程を報告し、その信頼性と妥当性について検討した。5つのモデルを想定した確認的因子分析の結果は、6つの尺度が相関関係を持つとした「6因子相関モデル」の適合度が高かった。6つの尺度は相互に関連を持つものの、相対的に独立した因子から構成されているといえる。信頼性については、6つの尺度ごとにある程度の α 係数と再テスト信頼性係数とが算出された。罪悪感喚起状況尺度・状況別羞恥感情質問紙・対人的反応性指標(IRI)・心理的負債感尺度などの他の尺度との関係を検討した結果は、今回の尺度と概念的に対応する尺度と高い相関関係が認められ、収束的妥当性があることが示された。尺度の一部については、概念的に対応する他の尺度以外の尺度との相関が高いことがみられた。その多くは概念的妥当性を示す資料とみなすことができるが、この尺度の弁別的妥当性に問題を残す結果でもあった。また、この尺度が関連を持つと予想される行動を測定する尺度（向社会的行動尺度・攻撃性質問紙）との関係は、これまで示されてきたデータとはやや違った傾向を示し、今後の検討にゆだねられる点があった。いずれにしても、6種の自己意識的感情を具体的な場面を用いて同時に測定できるところに、この尺度の特色があるといえる。

以下では、今回用いられたシナリオ形式から生じる問題点とこの尺度が測定していると考えられる感情の性質などについて検討することとしたい。

1) シナリオ形式が用いられたのは、前に指摘したように、自己意識的感情が具体的な場面と結びついているためであった。ここで問題とした感情

は、具体的な場面で感じられ、その場面を離れては意味を持たないと考えられる。そのために、この種の感情をとらえるにはチェック・リスト法のような抽象的・概念的なやり方は適切とはいえず、具体的な場面を設定してのシナリオ形式が適切といえる。また、この種の感情の多くはある場面の中で同時に複数の感情が感じられるという特徴を持っている。こうした特徴を持つ対象を測定しようとするときには、やはり具体的な場面を示すシナリオ形式が役立つことになる。

しかしこの形式にはいくつかの問題点 (Tangney & Dearing, 2002) があって、その1つはこの形式をとる尺度では信頼性係数 (α 係数) が低下する傾向があることである。これは具体的な場面の性質によって回答が左右され、場面ごとに違った反応が回答されるために生じることである。具体的な場面を使うことでこの種の感情がとらえられるという点と、そうすることで回答の一貫性が落ちてしまうこととの兼ね合いが、シナリオ形式では避けられないことである。2つ目には、シナリオ形式ではとり上げる場面の数が制限されるために、具体的ではあってもその感情が生起する場面をそこに広く含めることが難しいことがあげられる。今回のように、同時にいくつもの感情が生起するような場面を設定するやり方では、問題はさらに複雑になる。今回の尺度構成では、同時に6種類の感情を喚起させ得るような場面を選択することが必要であったが、これは作業としてはかなり困難なことであった。

以上のような問題点はあるにせよ、実際には、予想よりも信頼性係数 (α 係数) は低下せず、最終的に採用した12シナリオ版でもある程度の信頼性が得られている (Table 2)。このことは、ここで設定した場面の具体性が中程度のもの (個人によって異なる体験ではなく／抽象的なタテマエでもない) であったことを示しているのかもしれない。項目の抽象度と信頼性係数との関係はどの尺度構成でも問題になるが、シナリオ形式では特に

この点が問題になる。

2) シナリオ形式では、回答者のある場面での「タテマエ」としての反応ではなく、「ホンネ」がとらえられるとした。それは、求められているのが具体的な場面での具体的反応であって、何らかの抽象的概念や原理からの回答ではないからであるとされる。しかし、この種の回答の場合にも、部分的にある種の道徳的基準 (ここではそう感じてはいけない／こう感じるべきである) が作用することはあるといえる (Tangney & Dearing, 2002)。こう考えると、自己意識的感情尺度で測定されている「感情」がどんな性格のものなのかが問題になる。

この点で参考になるのは、感情社会学でいう「感情規則」の概念である (Hochschild, 2000)。感情規則とは、感情の問題を「私が感じること」と「私が感じるべきこと」とに分けて考える場合に、後者のことを指している。多くの場合に本人にはこの2つは区別ができず、そのことを意識する以前に、ほとんど自動的にあるスタイルの感情が体験されている。しかしそこに、ある規則の働きがあることは間違いがない。今回の尺度では言うまでもなく「感じること」を測定することが試みられているが、そこに「感じるべきこと」が入り込んでいることは否定できない。ある種の否定的感情 (個人的苦痛など) では、「そう感じてはいけない」という感情規則が回答を左右している可能性がある。そうした場合を含めて、この種の規則に対する敏感さには個人差があるから、今回のデータはこの個人差をとらえているものかもしれない。

3) 個人差ということから考えると、今回の尺度が測定しているのは、そこでとり上げた場面についての感情的反応性 (反応のしやすさ) の個人差かもしれない。Table 2 でみたように、今回の6つの尺度では一部の尺度 (個人的苦痛) を除いては、尺度間の相関関係が強かった。このことは、ここで問題とした6種類の感情の多くで、12の場

面ではほぼ同じような強度の反応がみられたことを示している。对人的負債感・罪責感・共感的配慮などの自己意識的感情では、それが自己にかかわるという特徴を持つことから、相関関係が高いという結果が出てくるのかもしれない。しかし一方では、この相関関係の背後には性格特性としての感情的反応性があるという考えも捨てがたい。シナリオ形式を採用したにもかかわらず、尺度の信頼性 (α 係数) があまり低くなかったことの背景には、感情的反応性の存在があるのかもしれない。このことは、この尺度について5つのモデルを想定して確認的因子分析を行った際に、 r の「2次因子モデル」の適合度が高かったことと関連することでもある。この2次因子が自己意識的感情であるとするのは1つの想定であるが、その中心にはここでいう感情的反応性があるのかもしれない。

4) これまで見てきたことの結果として、今回の尺度では弁別的妥当性に問題が残るデータが得られた可能性がある。言い換えると、概念的に対応する尺度以外の尺度との相関値が高くなるのは、「感じるべきこと」としての感情規則への敏感さや多くの状況で同じような強度で反応する感情的反応性のためと考えられる。もう1つの可能性は、今回の尺度がシナリオ方式をとり、同じシナリオで6種の感情を体験させているのに対して、ここで用いたそれ以外の尺度では単一概念(罪悪感だけ・心理的負債感だけ)が測定対象になっているためかもしれない。このために他の尺度では、他の類似の感情概念との関係(罪悪感と恥・負債感と個人的苦痛など)の検討が十分ではない可能性がある。IRI や状況別羞恥感情質問紙では、多次的にこの点を検討しようとはしているものの、それはそれぞれの尺度内部のチェックであって、その尺度外の感情概念との違いを検討したものではない。したがって、本研究における6つの感情の関連の高さは自己意識的感情の実態を示した可能性がある。しかし、本研究の結果だけではどの可能性が正しいのかを断言はできない。今後、こ

の全体的考察で述べた問題点と課題を念頭に置いた検討が必要である。

引用文献

- 相川 充・吉森 護 1995 心理的負債感尺度作成の試み 社会心理学研究, **11**, 63-72.
- 明田芳久 1999 共感の枠組みと尺度 上智大学心理学年報, **23**, 19-31.
- 安藤明人・曾我洋子・山崎勝之・島井哲志・島田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- 有光興記 2001 罪悪感、羞恥心と性格特性の関係 性格心理学研究, **9**, 71-86.
- 有光興記 2002a 日本人青年の罪悪感喚起状況の構造 心理学研究, **73**, 148-156.
- 有光興記 2002b 恥と罪悪感 教育と医学 8月号, 72-79.
- 有光興記 2002c 罪悪感、羞恥心と問題行動の関係 日本心理学会第66回大会発表論文集, 891.
- Batson, C. D. 1991 *Altruism questions: Towards a social psychological answer*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Davis, M. H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multi-dimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- デイヴィス M. H. 菊池章夫 (訳) 1999 共感の社会心理学 川島書店 (Davis, M. H. 1994 *Empathy: A social psychological approach*. Boulder: Westview)
- ホックシールド A. R. 石川 准・室伏亜希 (訳) 2000 管理される心 — 感情が商品になるとき 世界思想社 (Hochschild, A. R. 1983 *The managed heart: Commercialization of human feeling*. California: University of California Press.)
- ホフマン M. L. 菊池章夫・二宮克美 (訳) 2001 共感と道徳性の発達心理学 川島書店 (Hoffman, M. L. 2000 *Empathy and moral development: Implications for caring and justice*. Cambridge: University Press.)
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 菊池章夫 2003 TOSCA-3 (短縮版) 日本語版の検討 岩手県立大学社会福祉学部紀要, **5**, 35-40.
- 水野修次郎 1998 日本人米国留学生における原因帰属、罪、恥と学習適応との関係 カウンセリング研究, **31**, 256-269.
- 成田健一・寺崎正治・新浜邦夫 1990 羞恥感情を引

- き起こす状況の構造 — 多変量解析を用いて 人文論
究 (関西学院大学), **40**, 73-92.
- 岡田顕宏 2003 日本人大学生の恥および罪悪感傾向の
測定: TOSCA-A 日本語版作成の試み 札幌国際大学
紀要, **34**, 31-42.
- 桜井茂男 1988 大学生における共感と援助行動の関
係 — 多次元共感尺度を用いて 奈良教育大学紀要,
37, 149-153.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. 2002 *Shame and guilt*. New

- York: The Guilford Press.
- Tangney, J. P., & Fischer, K. W. (Eds.) 1995 *Self-conscious
emotions: The psychology of shame, guilt, embarrass-
ment, and pride*. New York: The Guilford Press.
- 豊田秀樹 1992 SASによる共分散構造分析 東京大学
出版会
- 豊田秀樹 2000 共分散構造分析 (応用編) 朝倉書店
— 2004. 11. 29 受稿, 2005. 7. 8 受理—

Construction of Self-conscious Emotion Scale

Akio KIKUCHI¹ and Kohki ARIMITSU²

¹Iwate Prefectural University

²Kobe-Shinwa Women's University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2006, Vol. 14 No. 2, 137-148

Using confirmatory factor analysis, a new scale was constructed with data from 628 university students. It had 72 items for 12 situations to measure 6 self-conscious emotions: feeling of interpersonal indebtedness, personal distress, shame, guilt, role taking, and empathic concern. Reliability of the scale, KA-JiKoKan-12, in terms of alpha and test-retest reliability coefficients was sufficiently high. Correlation coefficients with related scales of guilt situation, situational shame, interpersonal reactivity index, and psychological indebtedness, as well as behavior-related scales of aggressiveness and prosocial behavior were also high, indicating validity of the new scale. Finally, issues concerning construction of a situation-based scale, characteristics of emotions measured by the scale, and issues of discriminant validity were discussed.

Key words: self-conscious emotion, construction of situation-based scale, confirmatory factor analysis, feeling rules